図書館★NEWS

9月の特集

「 物の怪(もの け)・妖怪を探る 」

９月　開館スケジュール

通常開館　（平日）9:30～18:30,（土）9:30～14:30

9/21　文化祭古本市　出店のため休館

早稲田大阪学園
図書館発行　No.59
2019.9.1

文化祭！！

図書委員会&司書コラボで

古書と雑貨の店

「そうせつ堂」を出店します。

みなさんにお願い

ご家庭に不要になった本を

本・雑誌・漫画・参考書・赤本等

各図書委員に提供してください。

図書委員さんへ

9/12(木)昼休みに

図書館で委員会活動があります。

時事問題

9月　時事の棚

弾圧に走る中国

香港と台湾の抵抗

中国：政府の強権政治の勢いが止まらない

@香港：担保された自治が奪われそうに

@台湾：親米政権である蔡総統への圧力

■『現代地政学　国際関係地図』ﾊﾞｽｶﾙ・ﾎﾞﾆﾌｧｽ/ﾃﾞｨｽｶﾊﾞｰ21　■ｴﾘｱｽﾀﾃﾞｨｰｽﾞｼﾘｰｽﾞ『現代中国を知るための52章』『香港を知るための60章』『台湾を知るための60章』/明石書店　■Newsweek 日本版　『香港の出口』8/27号,『弾圧中国の限界』6/25号　他

水木しげる「ゲゲゲの鬼太郎」に始まり、今や怪異譚はひとつのジャンルだ。

日本人は事物に、どのように

霊的存在を見出してきたのか？

妖怪の根源に迫ってみる！

日本の妖怪の源流をたどる

「図説日本の妖怪」岩井宏美/ 河出書房新社

中世までは、「鬼」は陰陽師が、「天狗」は密教僧が説いた妖怪であった。中世では『百鬼夜行絵巻』が例えに、年月を経た器物が霊力を宿した「つくも神」が主流に。事物にスピリチュアルなものを見出してきた日本人の特色が見て取れる。江戸時代は妖怪繚乱！怪異に名前を与えて多数の妖怪を生み出した時代。水木しげるの世界に近づいてくる。変遷を知ると、日本人は妖怪に興味が尽きなかったのだと分かるよ。

実在の新聞怪奇ニュース記事

「明治妖怪新」湯本豪一/柏書房

明治中期頃まで、錦絵で事件を報じた錦絵新聞が存在した。今でいう写真週刊誌。それには、多くの狐狸妖怪や怪奇譚が登場する。実際の記事から仰天ネタを採取したのが本書。物の怪が引き起こすポルターガイスト、盗まれた寺の鐘から精霊が現れ悪人を震え上がらせた話(大阪市北区の鶴満寺、鐘も重要文化財）、夜中になると念仏を唱える石、ケチな姑が黒蛇の生霊に･･･など昔の都市伝説が山ほど！

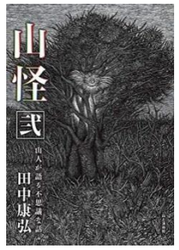
霊力をもった魔物たち、その正体に驚愕！

「陰陽師」夢枕獏/文春文庫

平安の都を舞台に、陰陽師安倍晴明が物の怪による怪異を続々解決する物語。巻頭は、醍醐天皇が愛した名器の琵琶が鬼に盗まれ、羅城門に取り返しに行く話。鬼の正体は、唐でこの琵琶を作った渡来人。亡者となって128年だが、祖国と亡き妻が忘れられず、琵琶との交換に妻に似た女官を要求する。契を交わした後、女を骨ごと喰らうところが怪物らしい。今昔物語や古今和歌集から題を得たものが多く、リアルと虚構の相乗で幽玄な世界に導かれる。（以上　千葉）

貴重な山人たちの体験はまさに「語り遺産」！

「山怪　弐　山人が語る不思議な話」田中康弘/山と渓谷社



幼い頃、夏休みに祖父母の古い家で過ごすことが私はとても恐ろしかった。高い天井の梁、先祖の遺影のある仏間、外のトイレ…。現代の住宅では感じられなくなったその恐怖は今でも山にはあるようだ。山で働き、暮らす人々が遭遇した科学では解明できない不思議な体験を、著者が取材しまとめたものがこの『山怪』。まさに現代版「遠野物語」だ。人魂や神隠し、狐憑き、山の中には錯覚で片づけることのできない怪異が当たり前のように存在するのだろう。

まずはマンガから古典にトライ！

「雨月物語　マンガ日本の古典28」木原敏江/中央公論社

『雨月物語』は江戸時代後期に上田秋成によって書かれた全九篇からなる怪異小説。こちらはその中から「菊花の約」「浅茅が宿」「吉備津の釜」「蛇性の婬」の四篇を取り上げ、漫画化したもの。裏切られた妻の怖い呪いから逃れられなかった夫の末路を描いた「吉備津の釜」は九篇の中で最も恐ろしいと言われているだけあってまさに鳥肌もの！霊の恐ろしさを通して人間の未練や執念を描いた『雨月物語』。読後は、恐怖や哀しみ、嫉妬、恨みなど…いつの時代もかわらないものなのだと実感。

じわじわくる恐怖！でもラストは…

「営繕かるかや怪異譚」小野不由美/角川文庫

「営繕」とは「栄造」と「修繕」をまとめて指す語で、建築物を新築または修理することを言う。家の中にいる怖ろしい「何か」をなんとかするのですが、解決するのは霊能者ではなく、営繕屋。霊やお化け、怖いモノはお祓いしたくなるものですが、なかったものにしてしまうだけが解決ではないらしい。「共存してやりすごす」とでもいうのだろうか？思いがけない解決策に少しホッとする。(以上　梅谷)

物の怪のふるさとへようこそ！

「図説遠野物語の世界」石井正己/河出書房新社

河童、座敷わらし、雪女、天狗といった物の怪は、岩手県遠野地方の口承伝承や村人が体験した話を柳田国男が聞き書きした説話集『遠野物語』に登場する。この本は、西洋化機械化が進む明治43年に出版された『遠野物語』の誕生の経緯、山々に囲まれた遠野地方の土地柄、天狗の持ち物、河童を見かけた滝など、写真資料で紹介している。民俗学研究の先駆けといわれる『遠野物語』から、物の怪の世界にひたってみて！

こんなところにも妖怪伝説が！

「知れば恐ろしい日本人の風習」千葉公慈/ 河出書房新社

古くからのなじみ深い風習やタブー、季節の行事や昔話など、数多くある中でそのルーツを調べたら妖怪や化け物が関連しているものがあった！節分の豆まきはなぜ炒り豆をまくのか？それは佐渡島に伝わる鬼の民話がヒントに。2月・12月の各8日「事八日」の日は妖怪が祟りに合う人を確認して回るとか。6月の夏前に川に入ると河童にさらわれるから「河童祭り」が行われる。現代でも妖怪の存在がなくなることはないようだ。

妖怪は今もあなたのそばにいる?!

「ユタとふしぎな仲間たち」三浦哲郎/ 新潮文庫

東京育ちのユタが東北の田舎に引っ越してくる。ユタに対して田舎の子供たちは冷たかった。そんな時「座敷わらしに友達になってもれえればいい。」と教えられ半信半疑で座敷わらしとの遭遇を試みる。よそ者を受け入れにくい田舎の文化。座敷わらしの謂れになった悲しい歴史的過去。ユタと子ども達が仲良くなっていく過程。1971年に出版された作品ながら普遍的なテーマで今でも瑞々しく心温まる作品。　（以上　田中）